

# 家族思いだった 岩下俊作

## 小倉祇園太鼓400年 八田翠さんに聞く



映画「無法松の一生」で知られる小倉の夏祭り、小倉祇園太鼓が今年400周年を迎え、6～7月にはその記念歴史展が北九州市立文学館で開催の予定です。「無法松」の原作「富島松五郎伝」の作者、岩下俊作は八幡製鉄所に勤めながら創作活動に取り組み多くの作品を残しました。無法松生みの親の素顔を、俊作の長男である八田敏弘さんの妻、翠さんに後藤みな子・文学館友の会会長が聞きました。(伊藤 和人)



披露宴での敏弘、翠夫妻と俊作(後方)。右は火野葦平。俊作の笑顔の写真は珍しい

— 俊作との出会いから教えてください。  
 友人の母が「創作研究会」のメンバーで、その勧めで小倉市役所に勤めていた敏弘と見合いをしました。昭和34年(1959年)の夏のこと。おじいちゃん(俊作のこと。以下同)は私を気に入ってくれて「早い方がいい。早く来なさい」。その年の11月に葬式。私が20歳の時です。小倉飯店での披露宴には火野葦平、劉囊吉、原田種夫といった九州文学の同人が集まり大賑わい。火野さんと劉さんの豊後浄瑠璃も聞きました。

— 今の小倉北区江南町に岩下家はあったんですね。  
 おじいちゃん夫婦と三男の昂さん、長女の文子さんの4人家族に私たち夫婦が同居。おじいちゃんは製鉄所勤めの間は朝

# 友の会会報

第8号

平成31年1月

北九州市立文学館

— 家族を大切に人だったんですね。文学の話はしましたか。  
 結婚してすぐ「翠さん、本は好きかね」と聞かれたから「明星とか平凡とかしか

— どんな人柄でしたか。  
 優しい人で、大声を出されたことは一度もありません。子供が生まれ、私たち夫婦は隣の離れに移りましたが、酔って帰ってくるとまず我が家に顔を出して「翠さん、お酒」と茶碗酒をねたりします。夫と文学の話をしながらか機嫌よく飲み、ペロペロになったところを家に連れて行く。孫もかわいがり運動会には必ず来てくれました。私が入院したときは、5万円を持ってお見舞いにくれました。

— どんないい人柄でしたか。  
 7時に出勤、夕方5～6時に帰ってきます。食事と風呂の用意が私の仕事でした。魚の料理を中心に、肉の代わりに魚を入れたすき焼きやおでんが好物。家族全員が揃っていないと機嫌が悪い。一家の主を中心にした、昔ながらの夕食風景でした。



孫をおんぶする俊作

— 岩下俊作 本名は八田秀吉(ひできち)。1906(明治39)年、小倉生まれ。小倉商業学校在籍時から同人誌活動を始める。第三期九州文学の結成に参加。「富島松五郎伝」が第10、11回直木賞候補となり「無法松の一生」として映画化されヒットする。以後「辰次と由松 諦めとほ言へど」「西域記」が直木賞候補となる。八幡製鉄所に勤務の傍ら「創作研究会」を作り若手を指導。退職後は市立郷土資料館長などを務めた。1980(昭和55)年1月30日死去。享年73。

— 「無法松」については何かおっしゃっていましたか。  
 「俺の作品は『無法松』だけじゃない」と、「富島松五郎伝」だけで評価されることを嫌っていたそうですが、直接本人の口から聞いたことはありません。でも映画になったことには満足して、喜んでいたと思います。子供と孫に恵まれ、晩年も小さな作品を書いていた。幸せな人生だったのではないのでしょうか。

— とにかくお酒が好きだったそうですね。  
 晩酌は毎晩。忘年会と新年会では飲みすぎ、晩年は毎年のように入院していました。それでも病室にお酒とタバコを持ち込んで。付き添いの私が医者に叱られていました。亡くなった時も私が病院のベッドで看取りました。飲まなければもつと作品を残せたのではと松本清張さんがおっしゃったそうですが、本人にはそんな考えがあったかどうか。

— 「創作研究会」の勉強会を自らで開いていたとか。  
 亡くなった星加輝光さんや佐木隆三さんらがみえていました。私はおでんを作ったりイカの塩辛を用意したり。酔っ払えばかりで離れに隠れていると「終わつたよー」とおばあちゃん(俊作の妻、愛子)から声がかかって片付けに行く。若い人たちに黙って飲ませて食べさせて、おじいちゃんは偉いと思いました。

— 読んでいたことありません。なので、文学の話をしたことはありません。資料整理はお手伝いしました。送られてきた同人誌や雑誌類がダンボール箱にゴチャゴチャに入れてあるのをより分けて揃えてあげたり、おじいちゃんの作品が載った九州文学などを知り合いに頼んで製本してあげたり。とても喜んでくれました。



販やかになり、また、年間入館者数も、グッズ販売前は  
一万人程度でしたが、以降は増えてきており、一定の成  
果が出ているのではないかと思います。

「友の会」としては、今後も支援活動を続けてまいり  
たいと思いますが、そのためにも会員の皆様の協力が欠  
かせません。支援活動のための具体的提案、行事・催し  
への積極的参加など、よろしく願います。

(加賀美清之)

友の会事業  
(特別企画展)

「特別企画展」を振り返って

『文学』というと、堅苦しく取っつき難いという雰囲  
気があります。文学館では、この先人観を少しでも和ら  
げ、より文学者、文学作品への理解を深め、文学に親し  
んでいただきたいとの思いから、開館以来、多くの企画  
展が開催されてきました。

展示に際しては、  
写真、年表、図表、  
作者自筆原稿などを  
レイアウトすること  
により、『文学』の  
堅苦しさを取り除く  
工夫が凝らされてい  
ます。「友の会」は  
この文学館の意図を  
理解し、少しでも支  
援したいとの思いか  
ら、平成二十六年度  
の「モンゴメリと花  
子の赤毛のアン展」  
よりグッズ販売を始  
めました。

その結果は別表  
(次ページ)の通り  
です。グッズ販売に  
より、特別企画展が



©2018「散り椿」製作委員会

回モントリオール世界映  
画祭で審査員特別グラン  
プリを受賞、国内の映画  
賞の受賞も期待されてい  
ます。巨匠、黒澤明監督  
の下で撮影助手と助監督  
を務めた木村、小泉の二  
人がタッグを組んだ念願  
の美しい時代劇です。葉  
室麟さんもこの作品の上  
映を喜んで下さることと  
思います。

(小倉昭和館館主  
樋口智巳)

映画と  
文学

葉室麟原作映画

小倉昭和館では映画監督や俳優さん達にご来館頂き、  
シネマトークを行って頂くことがあります。また上映作  
品の原作者の方にお話して頂くこともあります。この街  
に文学館があるからこそお越し頂けるのだと思っていま  
す。「共食い」の田中慎弥さん、「東京難民」の榎澤徹二  
さん、「八月の狂詩曲(ラアンデイ)」の藤野行の村田  
喜代子さん、「東京タワー オカンとボクと時々オトン」  
のりりー・フランキーさん、そして「昨年亡くなられた  
『蝸ノ記』の葉室麟さんにもご来館頂きました。

一月五日から二十五日まで昭和館では「葉室麟原作  
映画二本立て」として『蝸ノ記』(二〇一四年製作、監  
督・小泉堯史 出演・役所広司・岡田准一)と『散り椿』  
(二〇一八年製作、監督・木村大作 出演・岡田准一・  
西島秀俊)を上映致します。

『蝸ノ記』は第一四六回直木賞を受賞した葉室麟の小  
説を「雨あがる」「博士の愛した数式」の小泉堯史監督  
が映画化、この作品で岡田准一は日本アカデミー賞最優  
秀助演男優賞を受賞しました。

『散り椿』では小泉堯史が脚本に回り、「八甲田山」な  
どで有名なカメラマン木村大作が監督を務め、第四二

おすす  
めの本

『白い山』 村田喜代子著 文藝春秋  
一九九〇年六月二十五日発行

著者は一九四五年、旧八幡市に生まれ、現在は中間市  
在住。『罇の中』で一九八七年に芥川賞受賞後、数々の  
文学賞を受賞し、二〇〇七年に紫綬褒章を受章。

『白い山』には、表題作を含む七つの短編が収められ  
ており、女流文学賞を受賞している。この作品集の中の  
二つの短編の読後感を記してみたい。

『鋼索電車』は、祖父母のもとで暮らす姉弟の物語で、  
語り手は姉。いい子だと言われて育った彼らは、どこか  
よその子とちがうのんきさを身につけている。家の中は  
外の風にも波立たない井戸の底の水面と似ていると姉は  
感じている。彼女は近くのU山のケーブルカーへの思い  
入れが強く、鋼索電車という呼び名を知る。

ある日、父親が来て弟を引き取っていった。深い喪失  
感を抱く姉は、不安定な鋼索電車の形を、自分たちの身  
の上に似ていると気がつく。弟の友だちの「あのおいさ  
んは、きつと可愛がつてくれるぞ」という慰めも心に届  
かず、弟の電車と自分の電車がごとごとと、長い時間を  
かけて離合する空想に耽る。「弟への切ない思いが透明  
な筆致で描かれている美しい作品だと思う。

『白い山』には、十二人の老婆のいる十二の風景がオ  
ムニバス風に綴られている。谷間の孤独で明るい光の中  
で暮らす老婆。さざ波のように皺まみれな顔で、その皺  
は目や口を埋め、土偶のようにひなびている老婆。高い  
石段の上の家から風船のような軽さで野菜売りに降りて  
くる腰の曲がった老婆。四十年間もうすぐ死ぬと待ち続  
け、九十歳で逝った老婆。「彼女たちの飄々として、徒  
容とした暮らしぶりが淡々と語られる。「いつしか私に  
さまざまな連想が呼び起こされ、彼女たちの姿は、私の  
心象風景の中ですつぱりとおさまっていった。

この作品集には、随所に北九州とその近郊の風景が描  
写されており、帆柱山、平尾台、香春岳、英彦山、透賢  
那字美町など、山名や地名も登場してくる。

(三村保子)

### 友の会 特別企画展グッズ販売実績

年度	企画展名	会期	主な商品	売上額 (万円)	企画展 入館者数 (人)	年間 入館者数 (人)
H26年度	モンゴメリ 花子の 赤毛のアン展	H26.6.14 ~ H26.7.13	書籍、文具、マグ ネット、クリアアオ ルター、バッグ、 人形、ポストカード、 マガカップ 他	約 628 万円	8,083	26,564
		H26.7.19 ~ H26.8.31	書籍、絵ハガキ、 ノート、Tシャツ、 タオル、バッグ、 CD・DVD 他	約 260 万円	7,472	
H27年度	没後99年 夏目漱石 一瀬石山房の日々 ~ ピーターラビット のおぼなし ~ ピートルクス・ ポターの世界一	H27.5.2 ~ H27.6.21	書籍、一筆箋、絵 ハガキ、クリアアオ ルダー、ノート 他	約 42 万円	4,188	23,436
		H27.7.18 ~ H27.9.6	書籍、食器、フィギ ア、文具、ノート、 キーホルダー、ポ チ、ぬいぐるみ 他	約 325 万円	6,556	
H28年度	宮西達也 ワンダーランド展	H28.7.23 ~ H28.9.19	書籍、図録、DVD、 ポストカード、文具、 Tシャツ、トートバツ グ、フィギュア 他	約 244 万円	7,397	24,743
		H28.10.22 ~ H28.12.4	書籍、図録、チケツ トリアアイル、一筆箋、 ブックカバー、Tシャ ツ、バンダナ 他	約 92 万円	4,710	
H29年度	没後20年 司馬遼太郎展 ~ 21世紀 “未来の橋角”で 上橋菜穂子と (精霊の守り人) 展	H29.7.22 ~ H29.9.3	書籍、図録、ポス トカード、一筆箋、 クリアアイル、缶 バッチ、キーホル ダー 他	約 61 万円	5,070	22,536
		H29.10.28 ~ H29.12.10	書籍、図録、画(満 井陽一)、ポストカー ド	約 35 万円	3,973	
H30年度	まど・みちおの うちゅう	H30.7.21 ~ H30.9.17	書籍、CD、図録、 クリアアイル、一筆 箋、メモ帳、ポ ストカード 他	約 75 万円	5,355	-
		H30.10.27 ~ H30.12.16	書籍、CD、てぬぐい バッグ、ポストカード、 ノート、缶バッチ、ぬ せんべい 他	約 23 万円	4,305	

リレー  
エッセイ

## 「描かれた西郷どん展」 開会記念講話を終えて

北九州市立大学 生任 員大

大学で出会った今は亡き恩師に憧れ、その背中を追いかけて、日本近代文学研究の道に進んだ。だが間もなく小説と向き合っても、仲間たちほど熱中できていない自分に気づいて悩んだ。そんな時ふと思い出したのは、「誰しもが自分にしか立てない場所を持っており、そこに立つた者の研究は強い」という師の言葉であった。心が揺さぶられ、向き合えば時を忘れてしまうものを研究対象とし、自分の強みを活かしたアプローチをすることが大事だと教えてくださった。

熊本で育ち、師と出会うまでは文学より歴史に親しんできた私は、近代作家やその作品でなく、熊本を最大の激戦地とした西園戦争に、なぜか強く心惹かれるものがあった。しかし、それにもかかわらず、史実や「歴史の真相」というものにはさほど関心がなかった。歴史のフイ

クションの部分に、〈歴史〉を欲する私たちの姿が垣間見える気がして、それを文学研究の方法で浮き彫りにしてみたいと考えた。

以後、西園戦争に関する本を読み漁り、新しい師に学び、明治の戯作者や浮世絵師たちが戦況を報じるために手がけた、大量の読み物や錦絵の存在を知った。だが、それらはほぼ未整理の状態で、研究は膨大な資料の整理から始めなければならなかった。かつてそれを試みた先人もいたが、成し遂げた方はいなかった。私は「自分ならできる」と思った。性来の粘り強さに自信があったからである。こうして、西園戦争の表象研究に辿り着いた。

今、私は〈自分にしか立てない場所〉に立っていると思っている。しかしそれは、「自分にはこの人しかいない」という想いで結婚に踏み出そうとしている人たちの心情と同様、単なる思い込みには違いない。淋しくはあるが、私の代わりなど、誰にでも務まるのだから。しかし、そうした思い込みこそ、人をしばしば幸せへと導いてくれるものなのであつて（結婚もまた然り）、開会記念講話を終えた今、私はそのことを身をもって実感している。

会員投稿

## 静かなるドンから ボルガ川遡行の船旅(2)

—文学への思い—

弁護士 清原 雅彦

前号では、「静かなるドンからボルガ川遡行の船旅」の話を書いていただきました。

その時に、かの地を訪れた文豪の足跡を追体験し、文学に思いをはせました。あの偉大な文学を読んだ時の感動は、今の文学の中に息づいているのだろうか、私なりの考えを少し述べてみたいと思います。

さて、私には文学を語る資格などありませんが、文学の使命はもう終わったのかも知れない、と感じるこの頃です。若い人は文学を読まない。読んでも、エッセンスだけを頂こう、という読み方で、しつかり作者、作品のテーマに向かい合った読み方をしていない、と思われれますが、それは文学を教養という、いわばアクセサリのように用いて自分を飾ろうとしていて、自分を磨くために読書していないと思われれます。そして作家の方も上手なストーリーテラーは増えていますが、後世に残るような深い作品を書こうとしているようには見えません。生意気なようだが率直な意見です。文学のテーマはつきたのか、この複雑怪奇な世の中で人間はどう生きているのか、どう生きるべきなのかという巨大なテーマに挑む作家は出現しないのか。これが私の危機感のモトであります。

それと北九州の市民は文学的に誇るのに森鷗外一点張りではいけないと思います。森鷗外に連なる漱石や子規と広げていってもよいのではないかと思います。要するに文化を大切に市民として、鷗外を端緒に文学一般を愛する態度を身に着けたいと思います。

ところで、船旅で一緒にした女性は旅行中に「カラマーゾフの兄弟」を読み上げると言っていました。途中半分は読んだと言っておられましたが、無事最後まで読了したのだろうか。確認せずに、今回の旅は終わってしまいました。

